FROM THE FILMS OF

Harry Potter™

THE BLUEPRINTS

映画『ハリー・ポッター』シリーズ
公式美術設定＆図面集

BY: Jody Revenson

ジョディ・レベンソン／著

神武団四郎／監修　富原まさ江／翻訳

玄光社

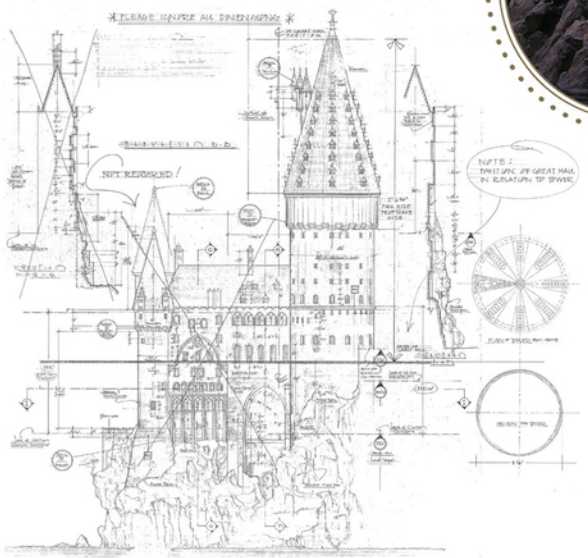
第一章　ホグワーツ城

CHAPTER I

HOGWARTS CASTLE

THE GREAT HALL

大広間

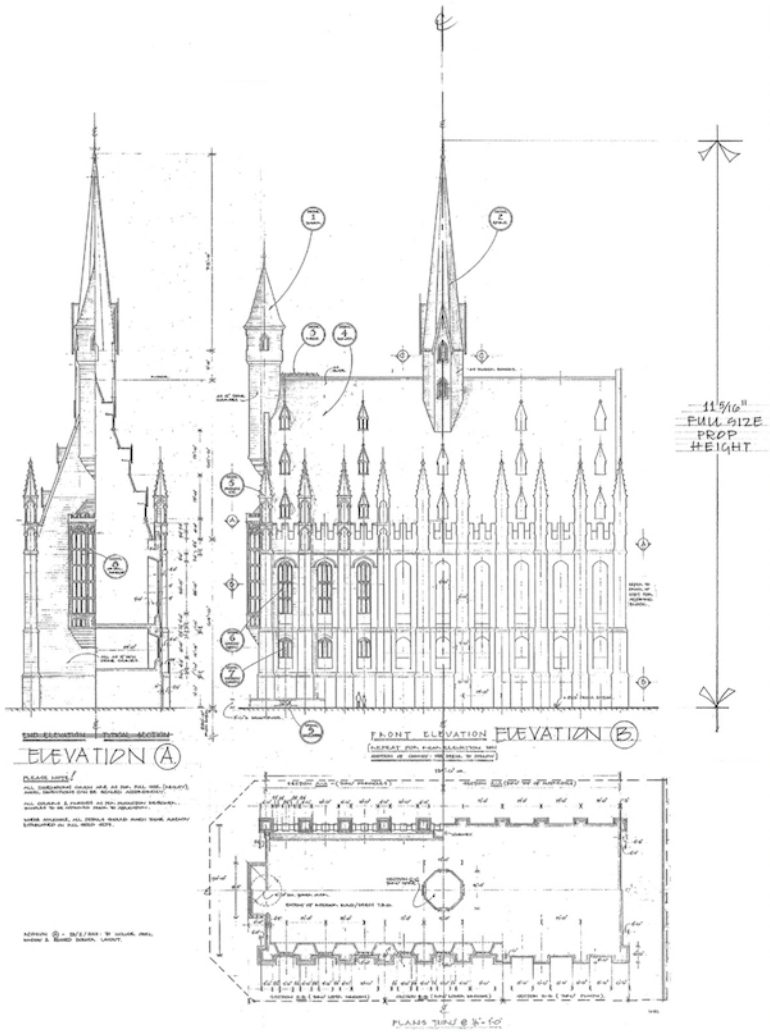


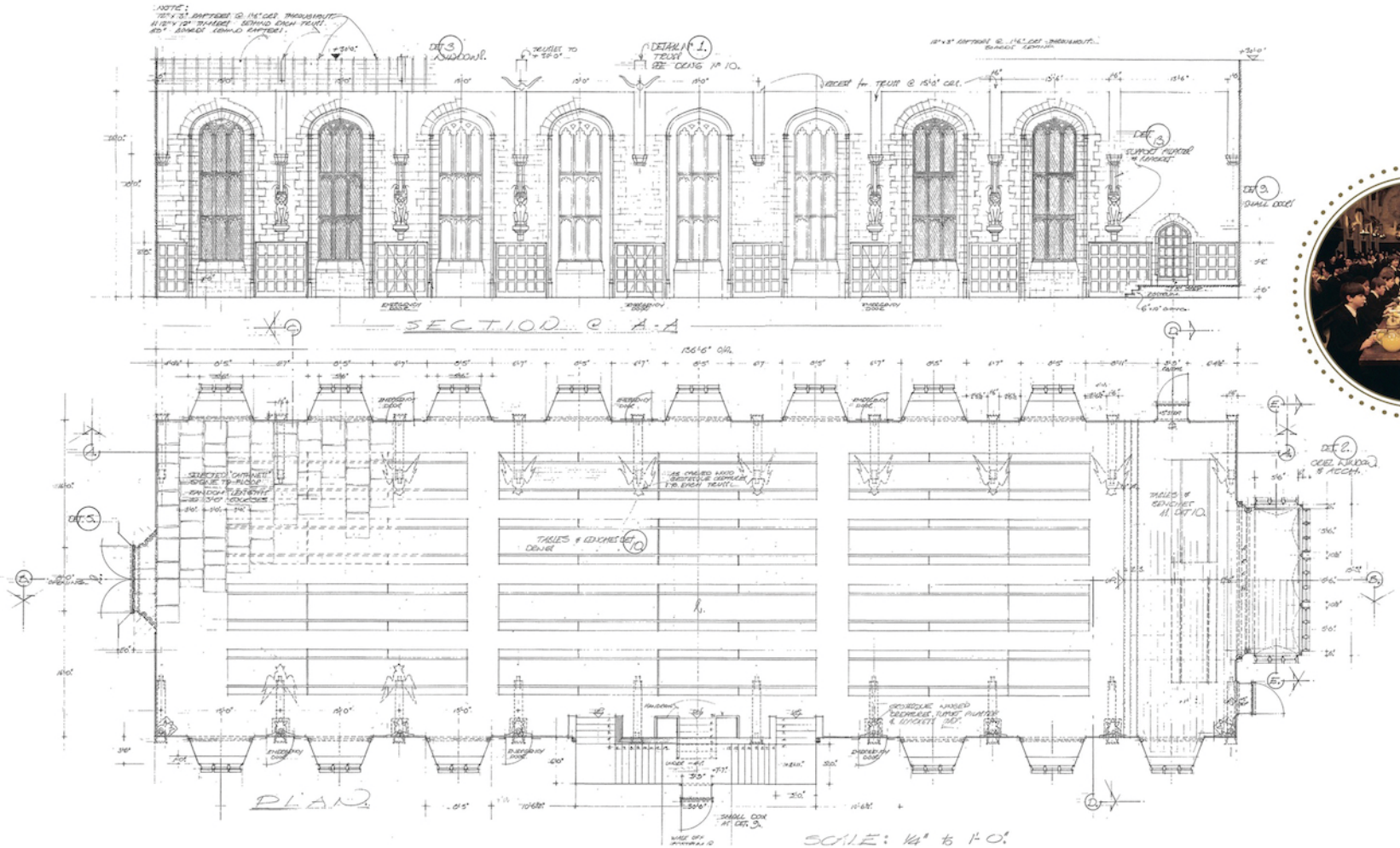
ホグワーツ城の大広間は、オックスフォード大学のクライストチャーチ・カレッジの大広間にヒントを得ただけでなく、幅40フィート(約12メートル)、奥行き120フィート(約36.6メートル)という同じ寸法が採用されている。残念ながら「窓に関しては、クライストチャーチは期待はずれだった」とスチュアート・クレイグは言う。「セットでは窓というのは非常に重要な要素で、中心的存在といってもいい。ところがクライストチャーチの窓と同じ作りにすると高すぎてほとんどカメラに映らない。そこで窓枠を低くして外が見えるようにし、端に大きな出窓を作って印象的でドラマチックな雰囲気を出すことにした」。クライストチャーチの大広間の天井も「僕らが求めていたものとはほど遠かった」とクレイグは続ける。「そこで、イギリスで最も素晴らしい中世の屋根がある、ウェストミンスター宮殿に行くことにした」。もっとも、14世紀に建てられたこの国会議事堂の天井はハンマー・ビーム・トラスが特徴的だが、ホグワーツ城の大広間の天井は室内に降る雪や宙に浮かぶキャンドルで隠れてしまうことも多い。

クレイグが映画『ハリー・ポッターと賢者の石』のセット制作に着手した当時、原作の小説はまだ第2作までしか発売されていなかった。「映画のほうは、第1作がヒットしなければ続編ができる保証はなかった」とクレイグは振り返る。「だが、そんなことを知らない僕らはかなり高額な買い物をしたんだ。本物の床材をね」。大広間の床には、イギリスの多くの都市に敷き詰められているヨークストーンが使用された。「もしセットを作るときにいつも使う漆喰やグラスファイバーを使用していたら、繰り返し撮影するうちにペンキが剥げ落ちていただろう」とクレイグ。「だが本物の床材ならその心配はない。それに、本物の石を敷いた床を歩いたときに響く音を聞けば、この世界の現実味が大きく増すはずだ」

上:『ハリー・ポッターと秘密の部屋』より、ホグワーツの3Dモデルを作る際に使用した大広間と塔の図面。最終的に、城の下に埋没された岩と荒々しい岩肌が配置された。

右ページ:『ハリー・ポッターと秘密の部屋』より、ホグワーツ城の大広間内部と外観のモデル用に作られた平面図と立面図。図面には、寸法はすべてフル・サイズであり、モデルの寸法はそれに合わせて縮尺するよう指示が書かれている。すべての細部は可能な限り既存のフル・サイズのセットの細部と一致させた。





見開き:『ハリー・ポッターと賢者の石』より、大広間内部の全体図。教授のテーブルと長テーブルの配置が示されており、この時点ではいくつかのセクションに分かれている。その後セット・デコレーターのステファニー・マクイランが100フィート(約30メートル)のテーブルを4つ作り、大広間に設置した。オーク材の羽目板の内側には非常ドアがある。

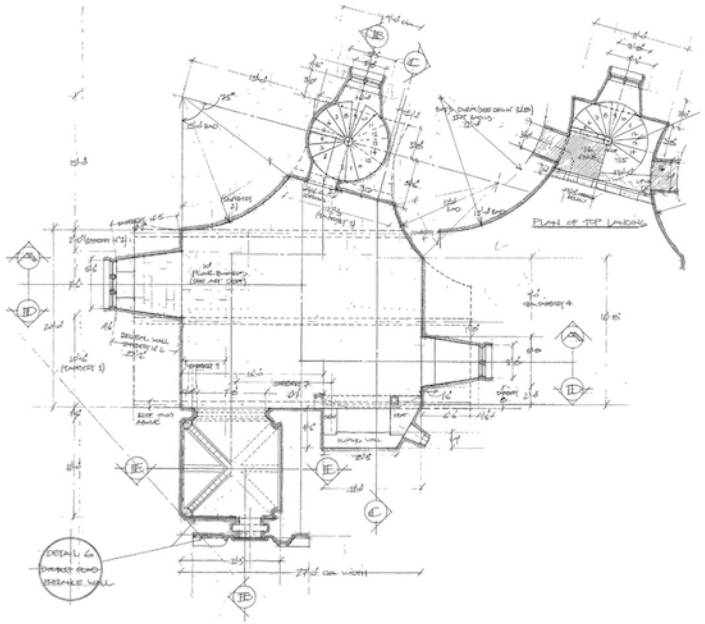
上、右ページ上:『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』より、この作品で最初にアルバス・ダンブルドアが登場する大広間で使用するふくろうの書見台の正面、背面、台座の図面。この書見台は木材に金メッキ加工され、経年加工が施されている。ふくろうが止まっているガラスの球体は土台部分に設置され、金のドラゴンがそれを支えている。側面と上面から見た図には、キャンドルの配置と傷んだ革が埋めこまれている様子が描かれている。

右:『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』より、天井の破風の参考図面。

右ページ下:『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』より、書見台を囲む燭台を四方から見た図。ふくろうと本を置く台座の間に置かれた燭台のキャンドルにはロウが垂れてきた跡があり、使いこまれた様子を表している。

GRYFFINDOR COMMON ROOM AND BOYS' DORMITORY

グリフィンドールの談話室と男子寮

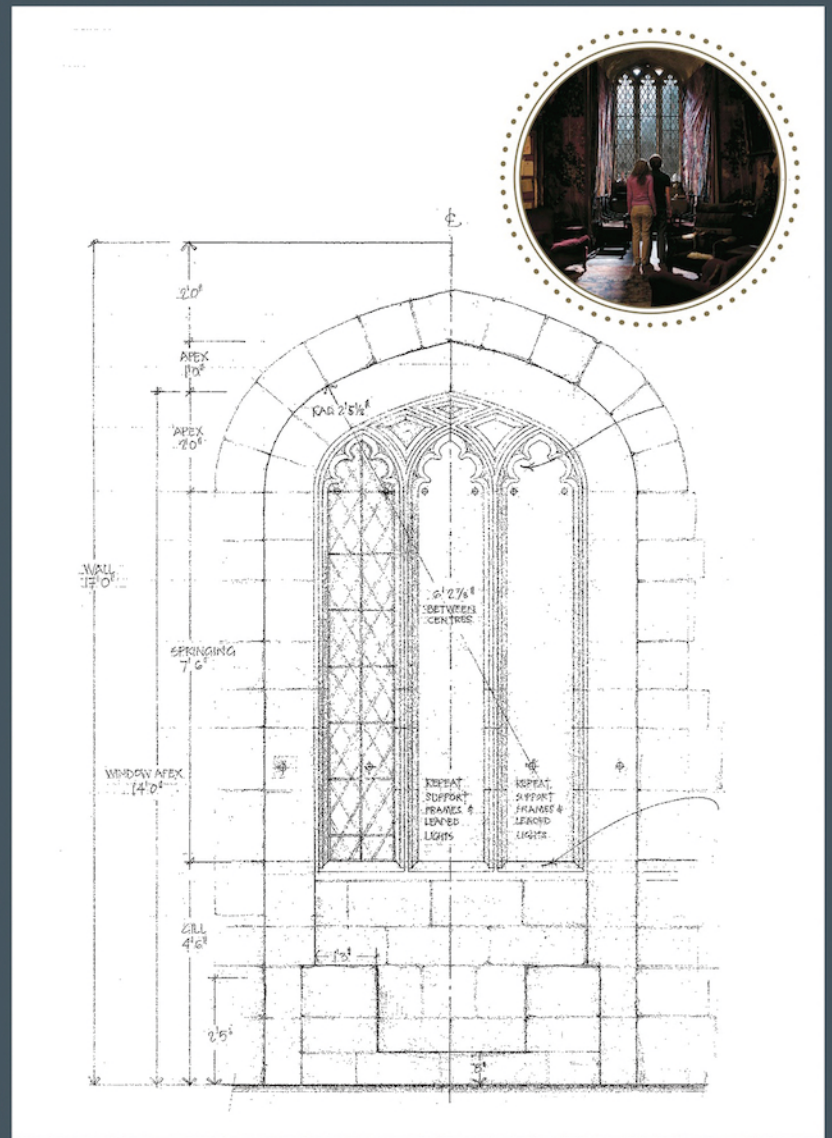


ハリー・ポッターはホグワーツ魔法魔術学校に入学する前、階段下の物置で暮らしていた。スチュアート・クレイグは、ハリーの「おばとおじのもとでの居心地悪い生活」とは対照的に「グリフィンドールの談話室では安心できる家庭的な雰囲気を出したいと思った」と語る。談話室には大きな暖炉と使いこまれた古いソファがあり、すり切れたカーペットが敷かれている。「暖炉の周りには豪華なタペストリーが飾られ、内装は赤を基調とした、温かく包みこむような、まるで子宮のような空間だ」。クレイグは、この場所をハリーが手に入れることのできなかった家庭ととらえている。この談話室はシリーズを通して大きな変更はされていない。「いつも同じ場所に戻ると落ち着くものだからね」とクレイグは言う。

この親しみやすい雰囲気は、談話室から小さな階段を上ったところにある男子寮にも共通する。「ハリーの不安感は彼のキャラクターを探る上で重要な要素だった」とクレイグ。「寮をデザインする際には、ここがハリーの避難場所であることを強く意識したよ。意図的に狭くし、箱型の四柱式ベッドにカーテンをつけて包みこむような感じにしたんだ。この部屋でハリーは落ち着くことができ、安心感を抱く。ホグワーツ城のほかの広大な場所とは対照的な場所だ」

上:『ハリー・ポッターと賢者の石』より、グリフィンドールの談話室の平面図と立面図。フランスのクリュニー中世美術館所蔵の中世のタペストリー「貴婦人と一角獣」連作のサイズと配置が示されている。この赤と金のタペストリーはグリフィンドール寮のシンボルカラーと同じだったため、制作陣は美術館のスライドからデジタルコピーを作成する許可を得た。

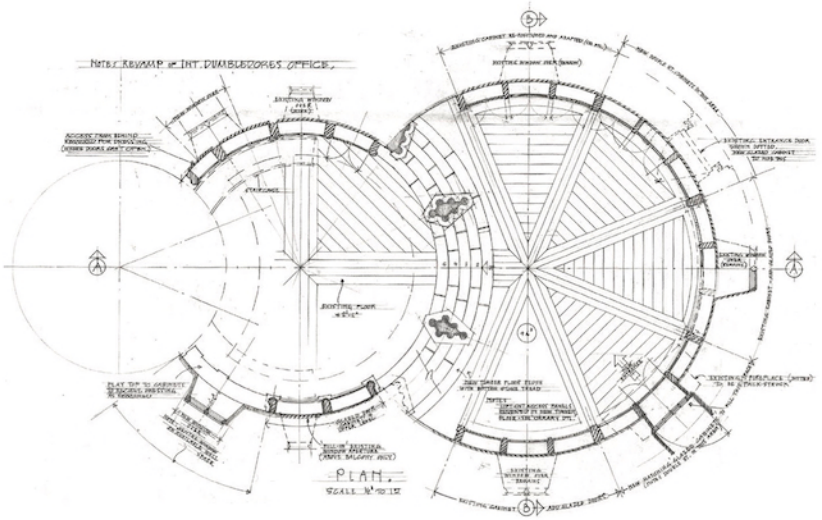
右ページ:「貴婦人と一角獣」連作の間に配置されたグリフィンドールの談話室の窓の詳細な修正設計図。担当スタッフに宛てた説明には、窓の下に設置する石造りの横段を調整し、窓枠を化粧石(石を好きな形に加工したもの)のように見せるという変更点が書かれている。



天文学の授業

『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』では大量殺人鬼として投獄されていたシリウス・ブラックが脱走してホグワーツ城に向かうと、魂を奪う吸魂鬼（ディメンター）たちがホグワーツ特急に侵入し、学校を取り囲んで彼を探し出そうとする。列車内でも学校でもハリー・ポッターは吸魂鬼に遭遇するたびに危うい状態に陥ったため、リーマス・ルーピン教授は吸魂鬼の闇を消し去る守護霊の呪文を彼に授ける。ルーピンはポッターを誰もいない天文学の教室に連れて行くが、この部屋は実際にはアルバス・ダンブルドア校長の部屋を改造したもので、当時からすでに複数の天体観測機器などが設置されていた。石造りの床は木で覆われ、キャビネットは取り外すか別の場所に移動された。校長室の窓はすべて作り物の窓で覆われ、別の場所に新しい窓が設置された。

教室の備品のなかに2体の大きな太陽系儀があった。惑星の位置を示す、動く太陽系模型だ。また、脊柱の形をしたキャンドルの一番上とその次の椎骨は本物のロウで作られ、実際に火をつけることができた。

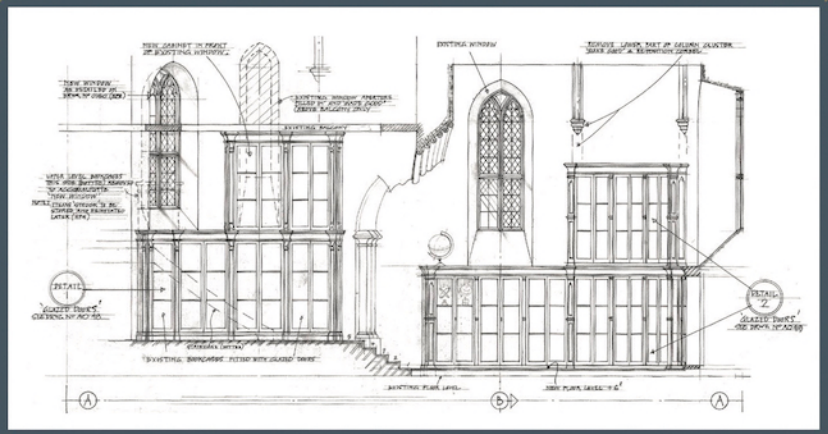


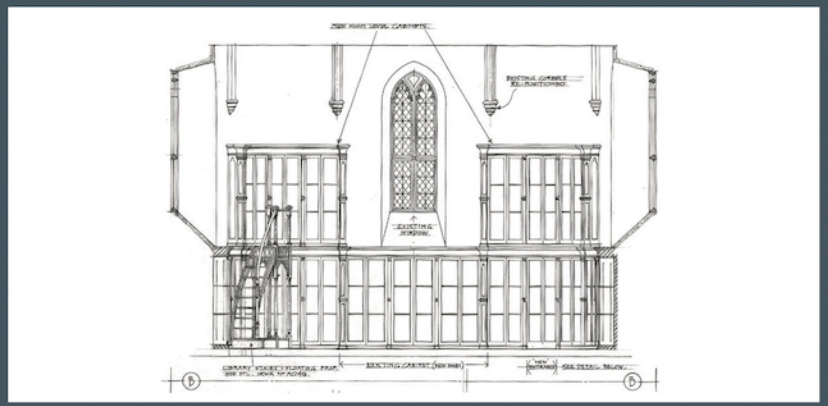
上：『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』より、リーマス・ルーピンがハリーに守護霊の呪文を教える天文学の教室の俯瞰図。このセットは、ダンブルドアの校長室を改造したものだ。すでにあったバルコニーや窓の一部を利用し、そのほかの窓を壁に変えた。

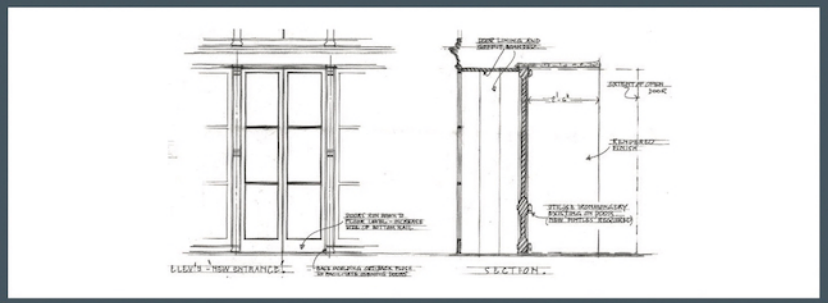
右ページ上：校長室で最も背が高かった本棚は新しい窓の位置に合わないため撤去され、柱の下部はコーベルに差し替えられた。また、各キャビネットにガラス張りのドアを追加し、その多くを改造して高さを足した。この図面で最も重要な書きこみは、校長室から持ち出したものは捨てずに保管し、天文学の教室の撮影後にまた元に戻すというものだ。

右ページ中：ルーピン教授の授業は教室の最上部で始まるため、図書室の階段が追加された。これにより、ルーピン教授は「闇の魔術に対する防衛術」の教室で階段つき談教壇を下りるのと同じような登場の仕方をすることになった。

右ページ下：新しいキャビネットの扉の詳細図。

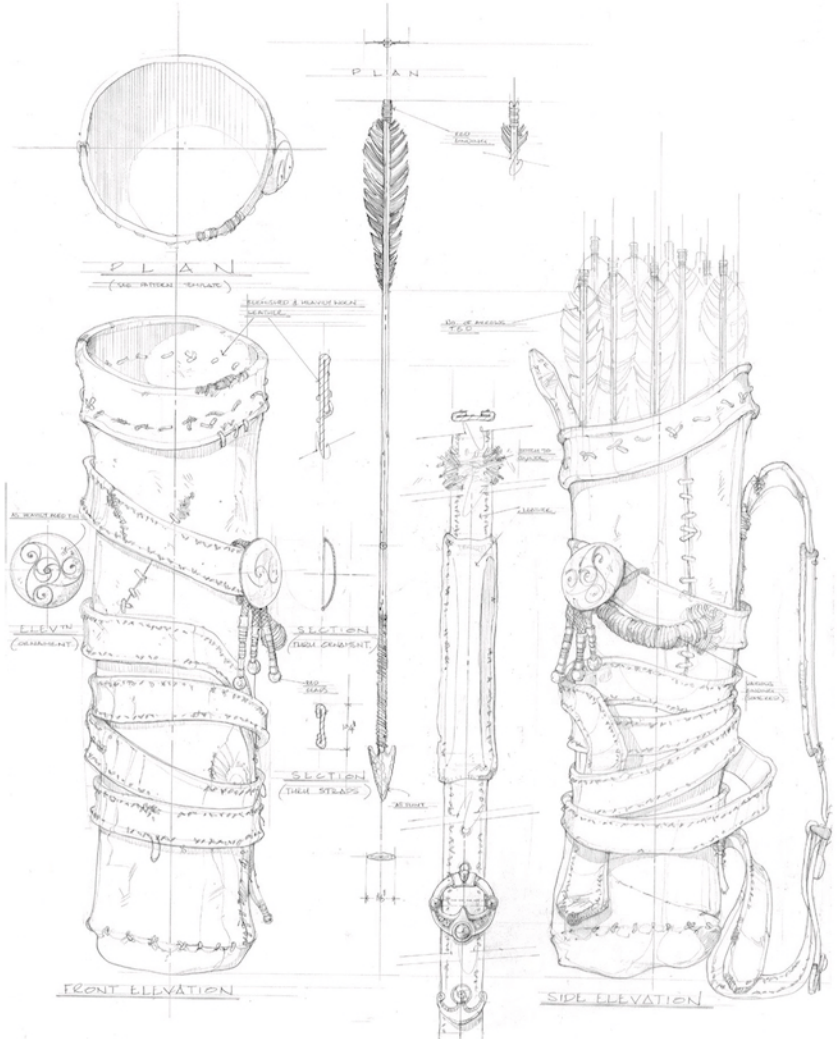


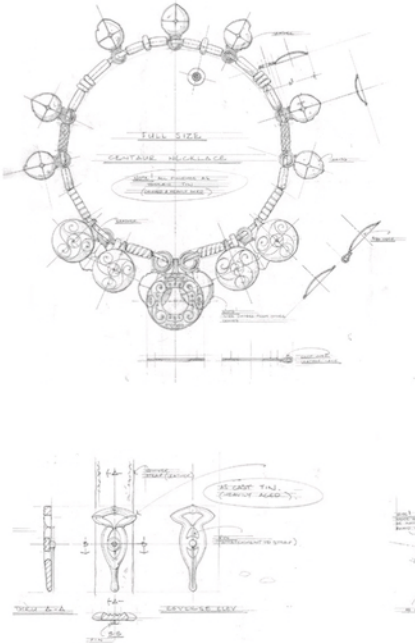


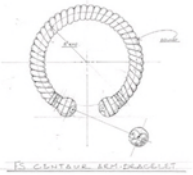


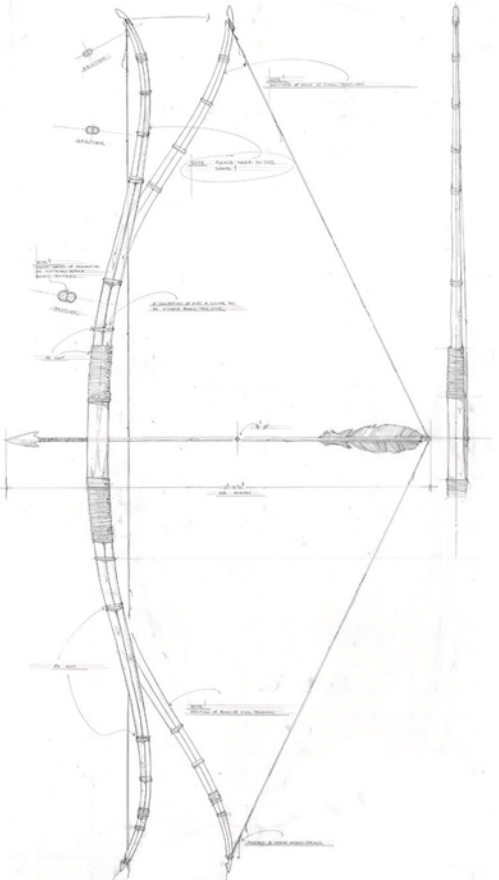
CHAPTER 2

HOGWARTS GROUNDS









見開き:『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』より、「禁じられた森」でドローレス・アンブリッジ教授と対決したケンタウロスの群れのために武器や宝石が制作された。

左ページ:矢筒と矢の詳細図。矢筒は革製で、傷や擦り切れた跡が目立つ革で巻かれている。銅のメダルと赤いビーズで装飾され、赤く縁取りされていた。矢の先は火打ち石で、矢羽の上の矢筈(やはず/矢の末端の弓弦を受ける部分)は赤く塗られている。

上左:革とビーズで作られたケンタウロスのネックレスの詳細図。葉の形をした銅のペンダントと、ケルトのトリスケリオンが刻まれた丸い・メダリオンがついている。一番大きなメダルは、アラビア風のトレーサリーが左右対称にデザインされている。

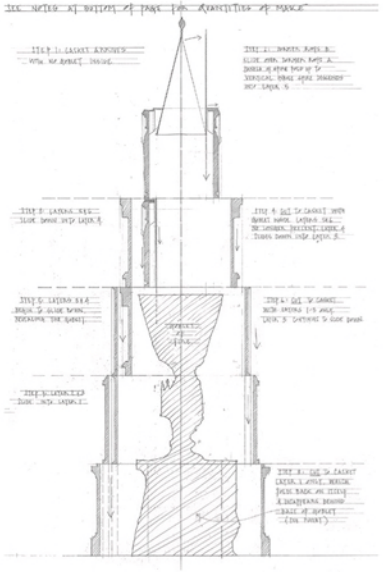
上右:ケンタウロスの腕輪のデザイン。このスタイルは古代スコットランドのコラック(首輪)や、ケルトのトルク(首や腕につける端が開いた装身具で、しばしば金属のひもをねじって作られた)を連想させる。

中左:矢筒の紐につける鈴のブローチの前面と背面の詳細。

右:ケンタウロスの弓と矢の詳細図。引かれていない状態と張力を最大にした状態が描かれた弓は、側面が平らな2本の枝を汚れや垢が目立つガット弦で束ねて作られた。弦は擦り切れて綻んでいるように見える。

TRIWIZARD TOURNAMENT

三大魔法学校対抗試合

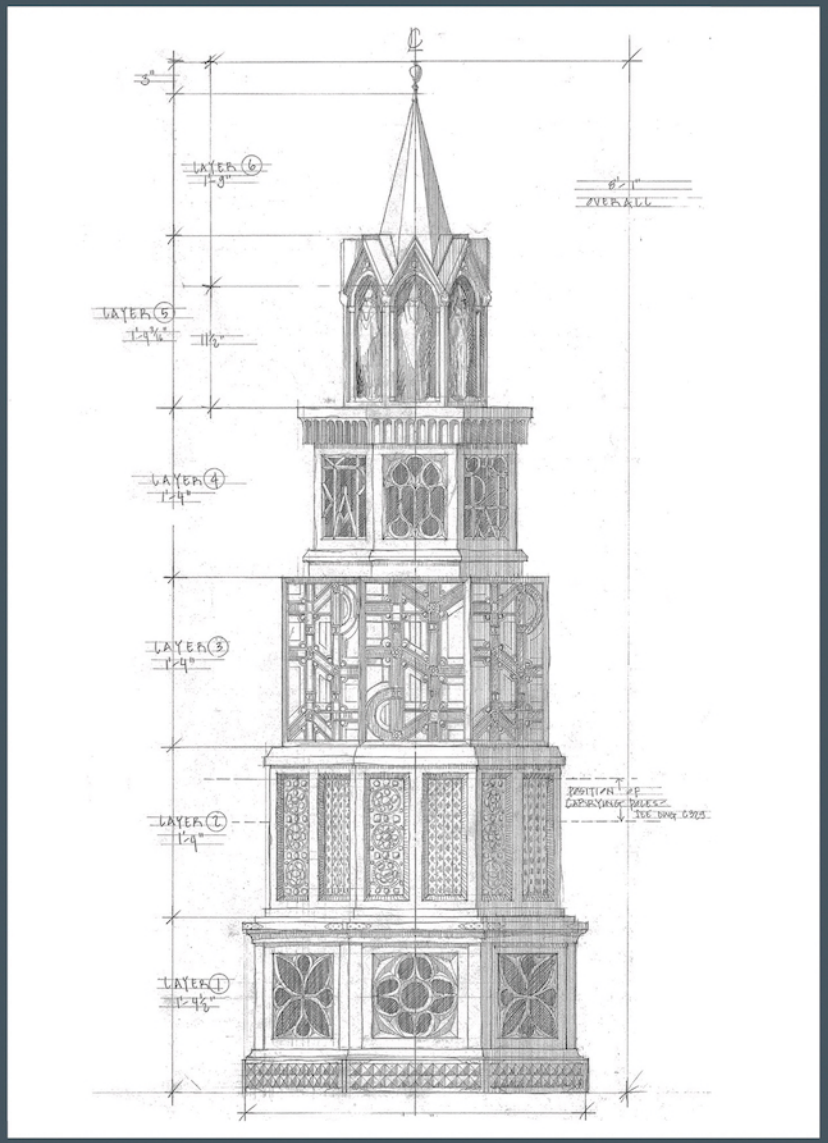


炎のゴブレットと箱

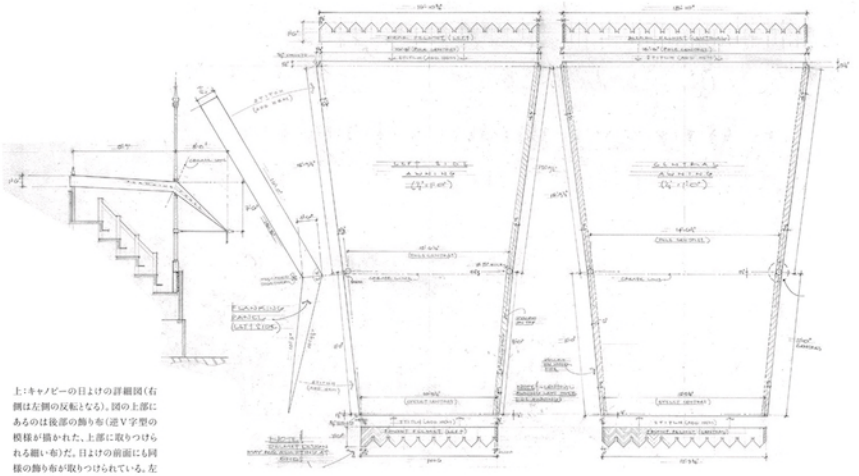
『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』では、ヨーロッパの三大魔法学校の間で3つの課題を競う親善試合、三大魔法学校対抗試合がホグワーツで開催される。ダームストラング専門学校、ボーバトン魔法アカデミー、そしてホグワーツ魔法魔術学校の代表選手は、宝石と金の装飾が施された箱に入れて届けられた炎のゴブレットに出場を希望する生徒が自分の名前を書いた紙を入れ、その後選考されるのだ。スチュアート・クレイグとグラフィックアーティストのミラフォラ・ミナは、この箱をデザインするにあたり中世の建築やイギリスの教会、ロシア正教会の装飾を研究した。「いろいろ調べた結果、アーチを積み重ねるというアイデアを思いついたの」とミナは語る。「そして宝石をたっぷり使うことで、教会のモザイクのように周囲の光を受けて輝くようなデザインになったのよ」。クレイグは当初、金属製で細かい宝石をちりばめた小さいゴブレットをイメージしていた。だが、結局「ベースは木製で、ゴシック様式のモチーフで装飾された巨大なゴブレット」になったと説明する。箱はすぐに「溶け」、高さ5フィート（約1.5メートル）の非常に有機的な木製のゴブレットが現れる。当初は箱が一段ずつスライドしてゴブレットが姿を見せる予定だったが、検討した結果そのシーンはCGで処理されることになった。とはいえ、制作チームはやはり撮影時には実物大の箱があったほうがいいと考えた。「だから、映画のなかの箱は本物」と話すミナは、大きな箱をセットの大広間まで運んだことをよく覚えているという。

上：「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」より、大広間でダンブルドア校長が生徒たちに見せた炎のゴブレットを納める箱の図面。この平面図では段が徐々に下がり、最後にゴブレットが姿を現すようになっている。結局この案は中止となり、視覚効果が用いられた。

右ページ：箱の外観の詳細なスケッチと装飾のアイデア。下から2段目に仕込んだポールで箱を運ぶという案も出たが、これも採用されなかった。

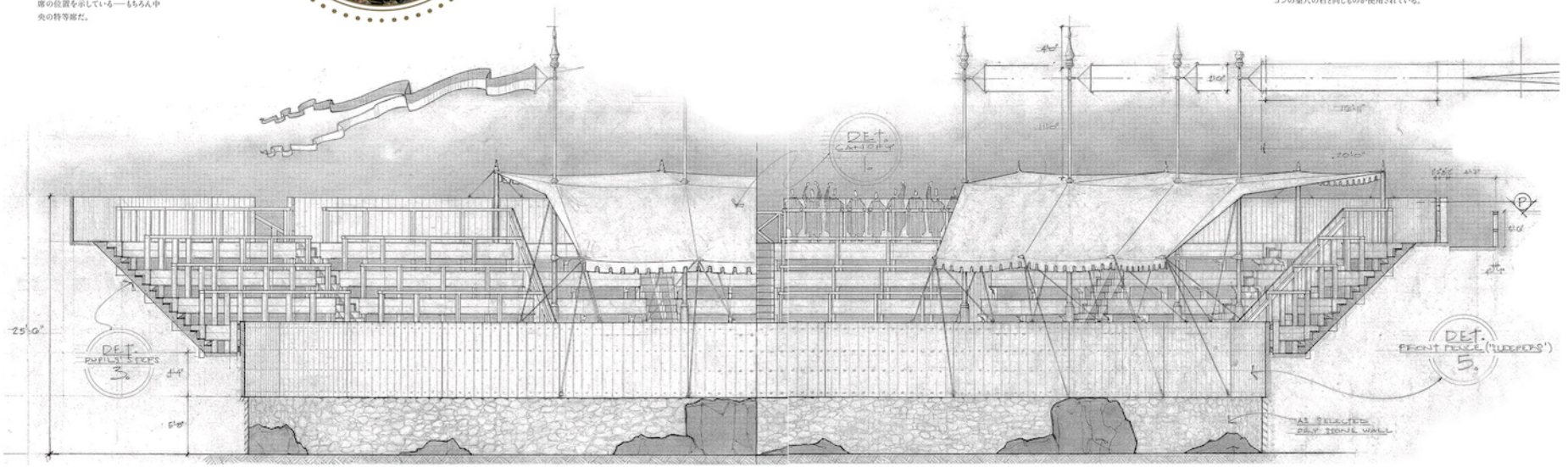


上：『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』のドラゴン競技場の俯瞰図。観客席は階段で仕切られ、矢印は教授専用席の位置を示している――もちろん中央の特等席だ。



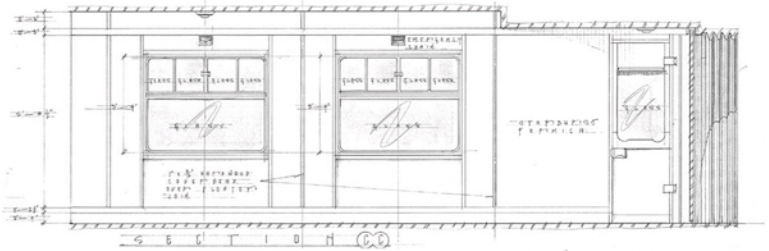
上：キャノピーの目よけの詳細図（右側は左側の反転となる）。図の上部にあるのは後部の飾り布（逆V字型の模様が描かれた、上部に取りつけられる細い布）だ。目よけの前面にも同様の飾り布が取りつけられている。左側はキング・ポールとクイーン・ポールにクロスステッチとマジックテープで取りつける隣接板の側面図。

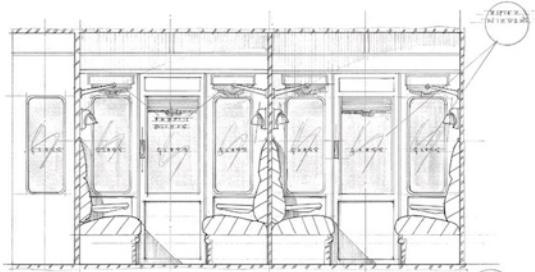
下：正面から見たドラゴンの競技場。キング・ポールから掲揚される旗を中心に描かれている。左は観客席に上がる生徒用階段の詳細で、目よけの下には教授と厳選された招待客が座る。観客席の前にはフェンスがあり、その下は石垣だ。ドラゴンの巣穴の石と同じものが使用されている。

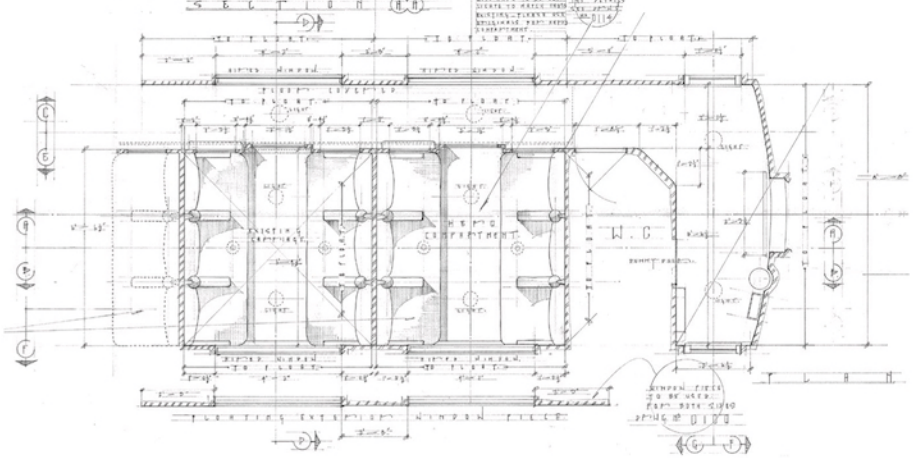


第三章　ホグズミード村

CHAPTER 3
HOGSMEADE



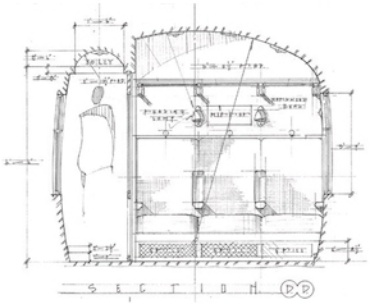


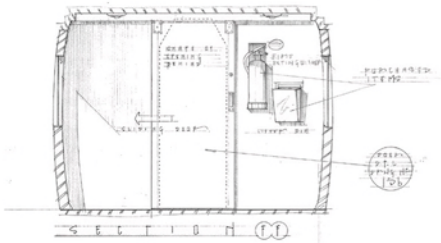


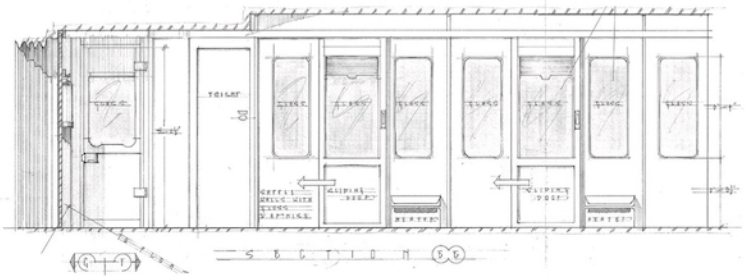
上:「ハリー・ポッターと秘密の部屋」の撮影時に改造されたホグワーツ特急の客車の平面図と立面図。スタジオAに設置されたこのセットは2ヶ所のコンパートメントの座席と付属品を撤去し、新しいコンパートメントを2ヶ所設置したものだ。

中:車両の断面図。コンパートメントの付属品は既存のものと同じように制作する必要があった。ハリー、ロン、ハーマイオニーが座る「ヒーロー・コンパートメント」と呼ばれる部分には第1作で作られた付属品を使用する旨の注記がある。

下:ホグワーツ特急の車両の俯瞰図。既存のコンパートメントの右側にヒーロー・コンパートメントが配置されている。左端のコンパートメントにもともとあった付属品はヒーロー・コンパートメントに移された。

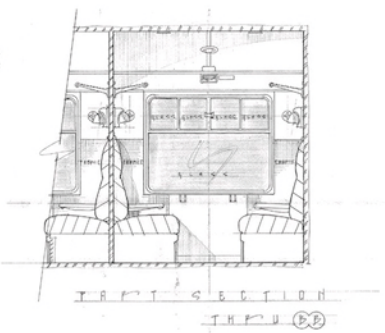






上左:左側にトイレの場所を示すサインがついたコンパートメントの断面図。荷物棚、壁と天井の照明、鏡、ヒーター、ドアの取っ手と鍵などはすべてレンタル品だ。

上右:消火器とゴミ箱はコンパートメントの付属品としてレンタルされた。

中:列車の通路の断面図。各コンパートメントの窓とスライドドアの配置。各コンパートメントの窓の下には、小さなヒーターが設置されている。車両の一方の端の手前には、トイレに通じるドアがあり、もう一方の端は星が飛び散る模様のフォーマイカで覆われている。

下右:コンパートメントの一部分、壁の布地と大きなガラス窓の詳細図。